

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02028

研究課題名(和文)『歴代法宝記』を中心とした禅宗思想史と教団史の研究

研究課題名(英文)Study on Chan thought and monasticism focusing on the Lidai Fabao Ji

研究代表者

齋藤 智寛 (SAITO, Tomohiro)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10400201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：敦煌文書中に保存された禅宗史書『歴代法宝記』について、国内外の刊行物に計7本の論文を発表し得た。一連の考察において、『歴代法宝記』は、教団史としては「白衣」や「居士」と呼ばれる半僧半俗の修道者の増加と、儀礼や戒律にとらわれない実践のありようを背景とし、思想としてはそうした実践を「無念」の体現として積極的に意味づける思潮の中で編纂されたことを論じた。

同時に本課題は、「神会語録」や『壇経』における「無念」思想が『歴代法宝記』においては前述の教団史的背景により大きく変容していたこと、また『首楞嚴経』の受容史において、本書は前塵と仏性との弁別を語る際に多く『楞嚴経』を引用していたことを解明した。

研究成果の概要(英文)：With regard to the Chan/Zen Buddhist hagiographical work, the Lidai fabao ji (Record of the Dharma-Jewel Through the Generations) which was unearthed in the Mogao caves at the Silk Road oasis of Dunhuang in northwestern China, our project published seven articles in domestic and international publications. According to these articles, the Lidai fabao ji was compiled in the background of increase of practitioners who were called "Baiyi(White cloth)" or "Jushi(layman)", and when it argued the ideology of "Wunian(thoughtless)", it made the ideology related to their practice which criticises ritual and precepts.

We also compared the Lidai fabao ji with other sources such as the "Record of Shenhui" and the "Platform sutra of the sixth patriarch", revealed there is a largely transformation between Shenhui or the Platform sutra and Lidai fabao ji. And we investigated the role of the Lidai fabao ji in a history of acceptance of the "Shoulengyan jing".

研究分野：中国思想

キーワード：中国中世思想 中国仏教 禅思想

1. 研究開始当初の背景

本研究で中心的な資料として取り上げる『歴代法宝記』は、敦煌文書中に発見された古逸禅宗史書の一つである。本文献はイギリスのスタイン収集本が矢吹慶輝『鳴沙餘韻』に紹介され、『大正新脩大藏經』に収録されるなど早くから学界に知られて来た。もっとも早い研究成果である矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』(岩波書店、1933)は、本書に西天二十九祖説が見えること、念仏禅の記事が宗密の記録と対応していることなどを、すでに要領よく指摘している。戦後には柳田聖山によってさらなる研究が進められ、『初期禅宗史書の研究』第四章(法蔵館、1967)、『初期の禅史』解説(筑摩書房、1976)として結実した。柳田氏の研究はおもに燈史の発展系譜という視点でなされたため、西天二十九祖説や、特異な伝衣説に関心が集中しており、思想面の検討は不足していると言わざるを得ない。もちろん、無念や頓悟の思想を本書の特徴として指摘しているのだが、宗密や神清からの批判にただちに議論を移してしまい、本書における無念や頓悟そのものは実は明らかにされていないのである。

また本書の研究史を考える際に記憶すべきは、宗密や神清の禅宗史観に注目する柳田氏の活動時期と、本覚思想を否定する「批判仏教」が唱えられ始めた時期が重なったため、『歴代法宝記』を代表的な禅の墮落形態とする論調が一部に見られたことである。これは柳田氏が本書の急進性や大衆性を讃えるのと対照的な態度にも見えつつ、具体的な内容を検討せずに異端性や急進性といった標語で本書を理解しているという点で同じコインの表と裏であるとも言える。両者の研究はいずれも戦後日本における精神史の一齣として理解されるべきであって、この時期の諸論を歴史的な言説として誠実に受け止めつつも、自らの研究にあたっては一定の距離を置くのが今の研究者に求められる姿勢であるとおもわれる。

その後、敦煌トルファン学の進展にともない天津本やロシア本、またトルファン出土本の存在が報告され(田中良昭・程正「敦煌禅宗文献分類目録」、『駒澤大学禅研究所年報』20、2008)、また研究としては吉川忠夫「唐代巴蜀における仏教と道教」(『唐代の宗教』朋友書店、2000)柴新江『中古中国与外来文明』(三聯書店、2001)がそれぞれ道教やマニ教との関連において本書を論じたが、本書全体への理解には大きな進展はなかった。諸本の発見と図録の刊行が一応の落ち着きを見せている今、『歴代法宝記』の研究も新たな見直しと総合の段階に入るべきであると申請者は考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、先述の通り中唐に成立した禅宗史書『歴代法宝記』を中心的な資料として、盛唐から中晩唐に至る禅宗の思想と教

団の発展を総合的に解明することである。ここで言う総合的とは、思想史と教団(寺院経済・社会)史とを統一的に理解すること、また禅宗史の変化発展の中に本書を位置づけることである。具体的には以下の3点を論ずる。

(1) 本書は五祖弘忍の門人・智詵を派祖とするにも関わらず、六祖慧能と荷沢神会を正統としていることの意味を明らかにする。

(2) 「無念」の思想や、儀礼・戒律の破棄について、『歴代法宝記』に立伝の諸禅師が置かれた教団の状況、またそれに前後する時代の禅教団の状況から理解する。

(3) 『歴代法宝記』に記録された士大夫と禅僧の交渉について、その歴史的意義を考察する。

(4) 『歴代法宝記』と密接に関連し、あるいは本書が引用する諸文献について検討する。具体的には、禅文献では『六祖壇經』、偽経では『大辯邪正經』『首楞嚴經』の思想が検討対象となる。

3. 研究の方法

本研究は文献学の方法を採り、対象とする『歴代法宝記』を丹念に読解、考察することによって先に述べた研究目的の達成・実現をはかる。読解の底本としては、各種図録および International Dunhuang Project(<http://idp.bl.uk/>)に公開された敦煌・トルファン諸本をもとに校訂本を作成し、それに基づいて考察を進めることとしたい。申請時には敦煌写本の実物調査もおこなう予定であったが、申請額が満額認められなかったことなどによって断念した。ただし近年出版された高画質の図録や、新しい校訂や研究の成果によって問題無く研究は遂行できたものとする。

また本研究は思想史的な位置付けにも留意するため、『歴代法宝記』に前後するいわゆる敦煌禅文献や宗密、神清の著作のみならず、禅文献以外の偽経群、また本書とおなじ大暦年間に活躍した古文家、崇仏士大夫らの詩文をも資料として活用する。

4. 研究成果

初年度である2015年度は、『歴代法宝記』研究の準備として、敦煌本『六祖壇經』の校訂と訳注を完成させた。訳注作業を通じて、『壇經』およびそれと密接に関連する『神会語録』に見える「無念」の思想について、正確な理解を得ることができた。

研究代表者の考察によれば、荷沢神会における「無念」思想は、彼の般若中道の思想を基盤としており、単純に何も思わないのではなく無念だからこそ何者にも汚染されない智慧が自在に発揮できると説くものであった。またこの「無念」の法は、出家者のみならず在家信者にも説かれていたことが確認できた。

『壇經』においては、無念を宗と為し、無

相を体と為し、無住を本と為す」という成句が何度か繰り返され、「無念」が『壇経』の宗旨を表す言葉の一つとされている。この「無念」は、「無相」「無住」と並称されているように、智慧のはたらきよりは外境への執着からの解放により力点を置いたものであった。一瞬一瞬に連続する「念」を観察し、そのことによって主体客体を持つ「念」からの解放を目指すのである。

本課題の研究対象である『歴代法宝記』においては、六祖慧能条にも荷沢神会条にも「無念」の語が見えず、これを彼らの思想の核心とは見なさなかったことが知られる。『法宝記』の他の条においては「無念」は繰り返し説かれる概念であるから、このことは奇異に思えるが、恐らく該書の編者は保唐無住の説く儀礼や教理学の否定や頓悟思想と一体化した「無念」と、それに先立つ神会および慧能の「無念」が異なることを意識しており、無住独自の説として記録することを選んだのであろう。なお、敦煌本『壇経』訳注は「新国訳大蔵経」シリーズ（大蔵出版）の一冊として公刊が予定されており、2018年5月現在、初校を進めている段階である。

第2年次にあたる2016年度は、『歴代法宝記』考 山居修道と居士仏教』（『集刊東洋学』第115号、45-64頁、2016年6月）、「『大辯邪正経』と『六祖壇経』」（『古典解釈の東アジア的展開』京都大学人文科学研究所、137-164頁、2017年3月）の2本が主な研究成果である。

『歴代法宝記』考 山居修道と居士仏教』では、唐代中期の禅宗史書『歴代法宝記』について、そこに記録された禅僧らの伝記を検討し、次の3点を明らかにした。

(1) 『歴代法宝記』は悟りの正統性と教団の正統性とを分離する思考を持っており、四川の禅門を正統な法系としつつ、法系上は別系統となる慧能と神会の仏法を高く評価して、四川の諸禅師とはやや異なった禅法を唱える保唐無住について法系と悟境双方の正統を担保し得た。

(2) 彼らは「無念」の思想の下に儀礼を否定しており、その思想は経済的事情で規定通りの勤行を営むことができない山居修道のあり方を指示し、むしろそうした生活を真の仏法として意義づけるものであった。

(3) 本書において半分の紙幅を割かれる保唐無住の伝記を吟味してみると、彼の開悟の師・陳楚璋は白衣の居士であり、嗣法の師・無相との仲介役にも何人かの居士が関わっていた。一方、出家得度の師・太原自在や浄衆寺無相は形式的な身分を保証するためにのみ登場するかのようである。したがって、本書の中心思想である「頓悟」は在家仏教と深く関わっており、またその傾向は本書にやや先立つ禅文献にもすでに見られた。

次に『大辯邪正経』と『六祖壇経』においては、やはり居士仏教と関連の深い禅文献

である『六祖壇経』と、敦煌文書においてしばしば『壇経』と同一の卷子に連写される偽経『大辯邪正経』とを検討した。その結果、「邪正」という概念は『涅槃経』以来の仏教經典に淵源し道教經典『妙林経』と共有していることが明らかになった。

そして、「邪正」概念には仏性を「正」とする相対的な「邪正」と、煩惱と菩提の対立を超えた絶対の「正」とがあるが、いずれも『壇経』の中心思想である仏性と頓悟に関わり、この点から敦煌では両者が共に学習されたのであろうと推測した。

最終年度にあたる2017年度は、『首楞嚴経』と臨濟禅』（『臨濟録』研究の現在 臨濟禅師一一五〇年遠諱記念国際学会論文集』禅文化研究所、289-312頁、2017年6月）、「禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開」（『東アジア仏教学術論集 日・韓・中 国際仏教学術大会論文集』第6号、171-199頁、2018年1月）、「『付法蔵伝』とその受容 大住聖窟二十四祖像を例として』（『国際禅研究』創刊号、57-73頁、横166-150頁、2018年2月）の3本の論説を発表した。

『首楞嚴経』と臨濟禅』においては、八世紀の四川において『楞嚴経』への関心が高まっており、『歴代法宝記』はその中で編纂されたことを指摘した。『歴代法宝記』では、經典・教理の否定という基本思想が、主客すなわち本性と本性ではない心理活動との弁別というやはり本書で繰り返し議論される課題と結びつけられて語られる。そうした文脈では、『楞嚴経』的な思惟が『楞伽経』の引用や語彙によって記述されるのである。これは、禅思想を支える經典として、『楞伽経』に加えて『楞嚴経』が存在感を増していく過渡期の現象として理解される。

「禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開」では、有名な問答が禅門の共通知識として公案化し、また長期にわたり同じ問題に参学するのは荷沢神会語録に始まり、五代の『祖堂集』に至ると、慧忠の無情説法を解決するために多くの師に参じた洞山良价の逸話が見られ、あたかも後世の話題に参求するような実践が行われていることを指摘した。

『付法蔵伝』とその受容 大住聖窟二十四祖像を例として』では、『歴代法宝記』など禅宗燈史の西天祖統説にモデルを提供した『付法蔵伝』について、その本文は仏法の存続ではなくむしろ断絶を説いていること、本書にもとづく二十四祖像を刻む隋の大住聖窟は末法思想を主題として『付法蔵伝』の意図をよく理解していることを論じた。

以上のように、3年の研究期間において計7本の論文を発表し得た。『歴代法宝記』は、教団史としては「白衣」や「居士」と呼ばれる半僧半俗の修道者の増加と、彼らによる儀礼や戒律にとらわれない実践のありようを背景とし、思想としてはそうした実践を「無

念」の体現として積極的に意味づける思潮の中で編纂されたのであった。

同時に本課題は、「神会語録」や『壇経』における「無念」思想が『歴代法宝記』においては前述の教団史的背景により大きく変容していたこと、また『首楞嚴経』の受容史において、本書は前塵と仏性との弁別を語る際に多く『楞嚴経』を引用していたことを解明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

齋藤智寛、『付法蔵伝』とその受容 大住聖窟二十四祖像を例として、国際禅研究、査読有、創刊号、2018、pp.57-73/166-150
<http://id.nii.ac.jp/1060/00009467/>

齋藤智寛、禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開、東アジア仏教学術論集 日・韓・中 国際仏教学術大会論文集、査読無、第6号、2018年、pp.171-199頁

齋藤智寛、『首楞嚴経』と臨済禅、『臨済録』研究の現在 臨済禅師一一五〇年遠諱記念国際学会論文集、禅文化研究所、査読無、2017年、pp.289-312

齋藤智寛、『大辯邪正経』と『六祖壇経』、古典解釈の東アジアの展開、京都大学人文科学研究所、査読無、2017年、pp.137-164

齋藤智寛、『文殊説般若経』の伝播と禅宗、仏教文化研究、江蘇人民出版社、査読無、4号、2016年、pp.19-36頁

齋藤智寛、『歴代法宝記』考 山居修道と居士仏教、集刊東洋学、査読有、第115号、2016年、pp.45-64

大野晃嗣、齋藤智寛、渡辺健哉、東北大学附属図書館所蔵中国金石文拓本集：『附関連資料』の刊行によせて、東アジア石刻研究、査読無、第6号、2015年、pp.1-16

[学会発表](計6件)

齋藤智寛、五代宋初仏教史書閲読札記、首届仏教史論壇 仏教史料と史学工作坊、2017年11月4日

齋藤智寛、『付法蔵伝』と隋唐仏教の西天祖師説、「国際禅研究プロジェクト」第2回研究会(第 部会)、2017年7月29日

齋藤智寛、禅問答の誕生と公案禅・看話禅への展開、第六回日・韓・中国際仏教学術大

会「東アジアにおける禅仏教の思想と意義」、2017年7月1日

齋藤智寛、初期禅宗史書研究の現在、公開シンポジウム「初期禅宗史研究の現在 柳田聖山を超えて」、2017年1月21日

齋藤智寛、『首楞嚴経』と臨済禅、臨済禅師1150年遠忌記念『臨済録』国際学会、2016年5月14日

齋藤智寛、唐五代禅思想と『首楞嚴経』、中国中世文化研究会「特集：唐五代の道教と仏教」、2016年4月11日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

齋藤 智寛 (SAITO, Tomohiro)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10400201

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし